

4月度 土曜例会

茨木市福祉文化会館

2019年4月20日

ゲスト ; Mr. Norm Boniface (Australia)

テーマ ; “Strict Australian Borders – Should we build a Wall?”

最初に、2019年3月15日のクライストチャーチでの大量殺人の惨事、2018年6月の茨木・枚方地震（報告者注；大阪府北部地震）、2011年3月11日の東北の地震での犠牲者、そして前回 IIN でお話しさせていただいた後に亡くなった方々について思いを馳せたいと思います。

(合掌)

また、日本の新しい元号「令和」をお祝いしたいと思います。

本日、お話ししたいことは、

- ・最初の侵入と白豪主義
オーストラリアは特別か、
何故そうなのか？
- ・どうやってそれを守る？壁を作る？
- ・最大の侵入は？？

私の家は、クイーンズランド州の州都でオーストラリア 3 番目の都市ブリスベンにあります。

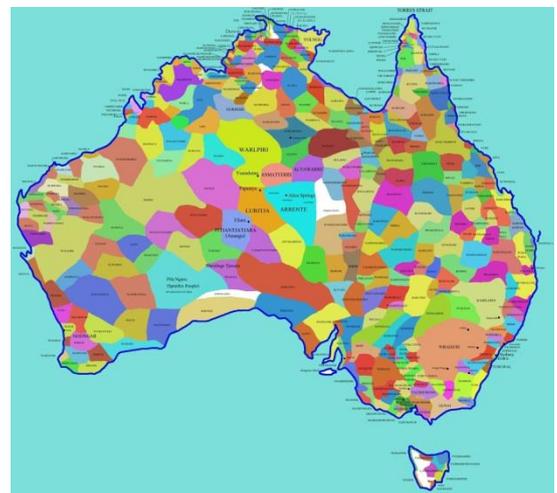
オーストラリアとパプアニューギニアとの間にはトレス諸島があり、指呼の距離にある。



オーストラリア先住民

ヨーロッパ人が来る前のアボリジニの国

- ・ 50,000-65,000 年前にオーストラリアに渡ってきたアボリジニの人たちとトレス海峡諸島民の 2 つのグループが、今日、オーストラリア先住民と呼ばれている。
- ・ 600 の部族グループからなり、250 の文化や言語を持ち、一時は 100 万人位いたと考えられている。
- ・ 現在は、オーストラリア総人口の 3.1% にあたる 775,000 人を占めている。



1788年からのヨーロッパ人の侵入

最初の南サウス・ウェールズ植民は 1,030 人（内 800 人が囚人で男 600 人、女 200）人だったとされている。

7頭の馬、29匹の羊、74匹の豚、6匹の兎、7匹の牛も一緒だった。

オーストラリア

国土は日本の 20 倍以上。

人口 25,000,000 人以上。

羊肉、鉄鉱石、石炭、ボーキサイトの
世界最大の輸出国。

海岸線は 25,760km であり、日本よりは
短い。（日本；29,751km）

国境防御壁を造るには巨大な壁が必要。



白豪主義

オーストラリアは、かつて非ヨーロッパ人を排除する「白豪主義」と呼ばれる壁を持っていた。

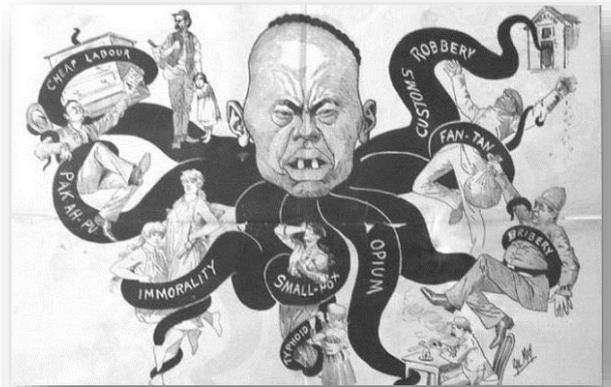
1850年代、ゴールド・ラッシュが起こり、中国を中心とする移民が増加。

1860年代に主に中国移民を規制する移民法を導入した。

1901年、オーストラリアが連邦制となり、移民制限法が成立する。

第二次世界大戦後、人口が7百万人の時、「人口増加か滅亡か」というモットーの下、移民受け入れに舵を切り、1970年代に白豪主義を捨てる方向に転換した。

1975年の「人種差別禁止法」により、白豪主義は終息を迎えた。



“Not politically correct”

白豪主義終焉後のオーストラリア

1975年のベトナム戦争後のベトナムからの大量難民や1989年の天安門事件後の移民受け入れ政策振興により、人口は17,000,000人から25,000,000人以上に増加した。

2011年以降、少数の政治的反対者（noisy political objectors）もいる中で、毎年190,000人の移民を受け入れている。

第二次世界大戦以来 2017 年までの移民受け入れは 7,500,000 人に達している。

(内訳は、技術を持つ人たち 70%、家族の呼び寄せ 30%)

オーストラリア外で生まれたオーストラリア人が 30% 近くにも上る。

(英 ; 4.0%、中国 ; 2.6%、インド ; 2.4%、イタリア ; 0.7% など)

第二次世界大戦以来、保護の必要な 880,000 人の難民を定住させ、移民人道プログラムで 19,000 人 (2018・29) をサポートしている。

しかしながら、同時に不法海洋漂着の問題もあり、オーストラリア外の遠隔地に難民を保護する”off-shore processing”キャンプもある。

(これらのキャンプは Manus & Nauru islands があつたし、今でも Christmas island がある)

”off-shore processing”は、密入国業者が苦境にある人々から利益を得るという事態を抑制する目的で実施されている。

密入国業者は、ナチスによる迫害から逃げてきた人を救ったシンドラーや杉原千畝とは違う。

この問題については、機会があれば、日を改めてお話ししたい。

イギリスの植民と同時に起こったもう一つの「侵入」

衣食住を満たすためには、動物や作物が必要であり、羊や牛と一緒に持ち込んだ。これらも「侵入」である。

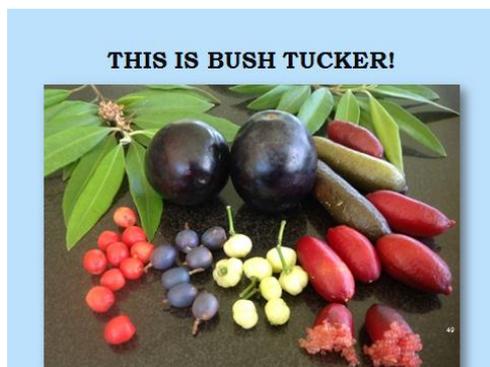
羊は肉と羊毛を供給してくれ、小麦やその他の穀物は豊かに実り輸出できるようになったが、自然な土地は変化し、木は伐採され、フェンスが築かれた。

先住民は、新たな生活基盤や動植物に混乱させられた。

彼らは、ブッシュ・タッカーと言われるカンガルー、ワラビー、コアラ、エミュー、鳥、魚、蛇やワニなどの爬虫類や植物などを食べていたが、ヨーロッパ人は食べなかった。

もともと、オーストラリアには、羊、牛、馬、バッファロー、ラクダなどの偶蹄動物はいなかった。

元々あつた自然や食物連鎖が破壊されてしまうことになった。



オーストラリアの多様性は、どうして生まれたか？

1億5千万年前、ゴンドワナ大陸が分離し始め、5000万年前に大陸から分離した。

更新世代（報告者注；地質時代の区分；約258万年前から約1万年前までの期間）に、有胎盤類がオーストラリアに再出現し、コウモリやネズミが化石から出現したことが分かっている。

氷期の海面の高さによりウォレス・ラインと呼ばれる生物分布境界線が出来て、オーストラリアやパプアニューギニアの生物は東南アジア、ボルネオ島、バリ島などと異なる。

5万年から5.6万年前に人類がオーストラリアに来て大型動物が消滅し、エコシステムが不安定となり、侵入によって影響受けやすくなった。

5,000年前くらいにデインゴと呼ばれる野生犬が侵入して多くの種を消滅させたと考えられている。

そして、1788年のヨーロッパ人の侵入と共に、ラクダ、馬、ラバ、水牛などの野生動物が入ってきた。

オーストラリアの56に及ぶ外来脊椎動物は三つのカテゴリーに分類できる。

- ・ 侵入
- ・ 野生化した家畜
- ・ 害虫ないし害獣

最大の侵入者；ウサギ

ウサギはトーマス・オースチンが、1859年に持ち込んだとされる。

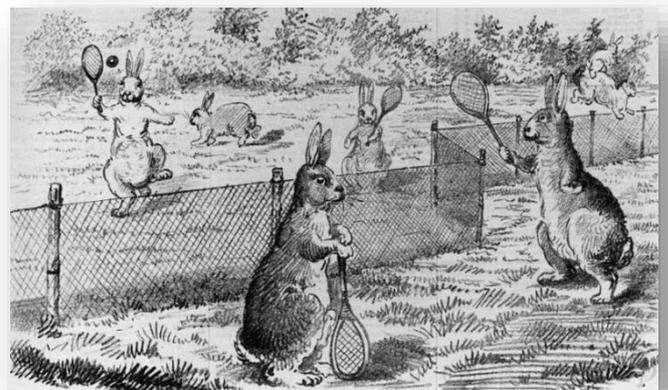
繁殖力が強く、1880年から1881年の1年間にニュー・サウス・ウェールズで762,000匹から5,092,000匹に増えた。

ウサギの巣や穴を破壊する試みは労多くしてあまり成功はしなかった。

1884年ウエントワースでは、わな、犬による狩、二硫化炭素ガスによる燻蒸、消毒、ストリキニーネやヒ素やリンによる毒餌などが推奨された。

クイーンズランドでは、1882年にウサギ迷惑条令が施行され、1,100kmの政府によるフェンスとその3倍の私有地でのフェンスが1886年までに作られた。

1884年の時事風刺漫画



また、1880- 85 年にかけて 5,614km のデインゴ・フェンスも作られた。

西オーストラリアはナボラー平原で石灰岩で守られていたが、ウサギ被害を免れることは出来ず、1901 年に 1,900km ものウサギ防御フェンスが作られた。ウサギ撲滅の種々の試みは失敗に帰した。

一方で、ウサギの肉や皮や毛は売り物にもなり、ロンドンやカルカッタに輸出された。



ウサギの数減少のための生物学的なアプローチ

粘液腫は、ウサギの数を制御するために 1950 年にウルガイからオーストラリアに持ち込まれ、6 億匹が 1 億匹に減少したが、耐性を持ったウサギにより、1991 年には 2-3 億匹となった。

オーストラリア連邦科学産業研究機構（CSIRO）は、1991 年からウサギに出血性の病気を引き起こすカリシウイルスの試験を行っている。

遺伝子組換えウイルスやウイルス・ベクター免疫避妊法なども試みられたが、2005 年には中止された。

2012 年、カリシウイルスの変種である致命的で伝染性の強い RHDV1 K5（ウサギ出血性病原ウイルス）が見い出され、2017 年オーストラリアの 600 地点で使われた。

ウサギの所有者はワクチン接種を勧められた。

ウサギが少なくなると、捕食する絶滅危惧種の保全が危機にさらされる。

これらの理由から、オーストラリアでのウサギに対する生物学的な戦いは適正なウサギの数の保存が極めて重要であると結論付けられた。

私たちは、ウサギとの戦いに勝利したのでしょうか？

あるいは、直近の戦に一時的に勝利しただけなのでしょうか？

この後、オーストラリアの洪水や森林火災の写真、そして白化した珊瑚礁の写真などを見せていただいた。



以下は講演内容ではなく付録です。

ノームさんとお話ししました。

ヨーロッパ人が侵入してオーストラリアの先住民を僻地に追いやると共に、持ち込んだ生物によりオーストラリアの自然や生態系を大きく変えてしまったことに対する”sorry”は前からおっしゃっておられます。

今回は、さらにウサギ撲滅のために行われた種々の施策やウイルスについても紹介されました。

人間が行うことがどれ位自然に影響を与えるのか、そして予期せぬ結果に対する人間の責任について私たちはどう考えていけばよいのかという提言をされたようです。